
《論 文》

レイモンド・カーヴァーの作品から3作品を読む —『ささやかだけど、役にたつこと』、『大聖堂』、 『保存されたもの』について—

川瀬 裕子

要旨

レイモンド・カーヴァーの作品、『ささやかだけど、役にたつこと』、『大聖堂』、『保存されたもの』の3作品には、共通の設定がある。いずれの作品においても、設定は都市周縁に発展し続ける郊外住宅街であること、登場人物たちは、30代前半の若い夫婦であることである。カーヴァーの作品を特徴づけるこの設定に何か作者の意図があるとすれば、この設定を文学空間とし、20世紀末のアメリカ社会の変貌とそこに関わる人物たちの人生の諸相を描出したことにあろう。郊外住宅街の開発は、アメリカの中産階級の庶民が、自分たちの家を所有するという願望の実現を可能にした。彼らが手中におさめたささやかな夢はその後どのように変化していくのだろうか。アメリカ文化の変容が行き着いた場として、郊外住宅街は新たにアメリカ的特質を生み出したニュー・フロンティアであるといわれて久しい。そこで何が起こっているのか、そこでの住民たちの人生の行方はどのような方向に向かおうとしているのか、カーヴァーは若い家族たちの日常を追いながら彼らの問題の本質に迫ろうとした。この小論においては、限られた空間で向き合う人物たちの周囲の行き場のない重苦しい空気や危げな関係を分析し、彼らに潜在する問題を考察することを意図した。大都市の喧噪や犯罪を避け、理想的な住宅街に見える環境は、やがて、孤独や退屈、不安や空虚の空気が満ちた住空間となっていた。精神的に不毛な日常生活に埋没する人物たちを描くカーヴァーの視点がそうした人物たちの危うい精神構造を見据えていることに留意し考察する。

キーワード： 郊外住宅 孤独 日常性

1

本稿においては、1960年代以降のアメリカ小説世界からレイモンド・カーヴァーの作品、『ささやかだけど、役にたつこと』（1983）、『大聖堂』（1984）、『保存されたもの』（1984）の3作品を考察の対象とする。これらの作品の登場人物たちは、他のカーヴァーの多くの作品にも見られるように、アメリカ社会の中では、決して大都会ではなく、むしろ、中小の都市周辺に新しく開発されていく郊外の新興住宅街の住民である。アメリカの都市の郊外は、かつての荒野のフロンティア消滅に代わる新しいフロンティアとして、人工的で、小奇麗で、整然とした住

宅街を形成していった。そこでは、社会的、経済的には背景を異にするが、大都会には見られない新しい郊外居住者たちの独特的文化背景をつくり上げるかにみえた。当初、斬新な外観には、人々の「アメリカン・ドリーム」実現の空気が充満していた。しかし、彼らを引きつけた移住時代も過ぎ、20世紀末へ近づき、郊外住宅には、かつての新鮮な魅力は失せていった。

このような郊外生活者の営む文化背景に潜む陰りについて、次の観察はカーヴァー作品を考察する上で大いに参考になる。

日常ならざる日常への眼差が、小説に限らず、様々な表現行為における隠れた主題として顕著になり始めたのは、70年代の前半あたりからではないかと思われる。これは、都市の郊外化へのプロセスと無関係ではない。20世紀後半、人々は、都市のかかえる人種問題や公害、過密、犯罪、老人問題から逃避するように、土地と一戸建てという新たな“アメリカの夢”を求めて、郊外へと流出していった。芝生のある静かな住宅街、腐敗の原因となる歡樂の要素を徹底的に排除し、無菌状態に保たれた人工の楽園。50年代には、マイホームのイメージが定着したが、実際には、そこには、楽園どころか、退屈、孤独、倦怠が支配する陸の孤島であり、しだいに、アルコール中毒やドラッグなどが暗雲を投げかけ、少年非行や家族崩壊の温床と化していく。¹⁾

この引用を解読すると、ひたすら物質的快適さを求めた挙句に、現実には、郊外住宅街にも漸次、居住者の交代があり、斬新さの意味が色褪せていったことが分かる。人々は、彼らが求めた「アメリカン・ドリーム」に欺かれることになる諸問題に直面することになっていったことが理解されるのである。

カーヴァーが、多岐にわたる郊外住宅の生活者の日常を好んで描くところとなったことについては、村上春樹のインタビューに答えて次のように語っている。「僕は、小さな町とか、一戸建ての家が並んでいる郊外とか、そういうところのことを書くことが多いかもしれない。…でも都会が嫌いっていうわけじゃない。僕の小説はだいたい屋内が舞台になっているから、別に田舎でも都会でも、どこだってかまわないんだ。」²⁾ここで、カーヴァーが屋内の出来事への関心と述べているのは、人物の日常生活の内部へ深く潜入することを意味し、屋内で交わされるとりとめのない会話や行為、周囲の家具調度品、食べ物、飲み物など事細かな日常の生活道具までが物語の構成上の役割を大きくするということを示唆している。それらが、人物の心情に作用し、あるいはまた、それらの道具の類が、人物に代わり無言の内に問題の核心を説明することになっていくのである。

カーヴァーは、人物の営む日常性の深部を洞察するとき、人物と物との関係の中に、問題を

見届けようとする。人物の座る位置、使う道具との関係が物語の行方を左右する技法となっているのである。そこには、急激な場面転換はないが、静かな変化が起こっていく。人物の視線が向ける先にある物がその人物の心情のあり方を表わし、周囲の空気を振動させ、人物の語る言葉以上に圧迫感を与える。カーヴァーがどのようにそうした手法を紡ぎ出そうとしているか、細部に注意を払い、観察していかなければならないのであるが、先の村上春樹のインタビューの前段の部分には、二人の作家の興味深い会話がある。日本では、村上により翻訳されたカーヴァーの作品が多く読まれていることに言及して、彼の作品のどんなところが、日本人の読者に好意的に受け止められているかに話しが及んでいる件りが以下の引用である。

「どんなひとびとが僕の本をよんだんだろう？」と彼が質問した。
 「おおむね若い人達ですね。でも批評も好意的でしたよ」
 「それはいい。とてもハッピーだ。ザッツ・グッドそれはいい」
 どういうところが受け入れられてんだろう、と彼が訊く。
 「これは僕の個人的な意見ですが、あなたのストーリーと日本の伝統的な短編小説のあいだにはある種の共通項があるんじゃないでしょうか？」
 「ふうむ。たとえばどんな？」
 「例えばですね、あるひとつの状況があって——これはどちらかといえば個人的なドメスティックな状況なわけですが——そこに変化が起こる。
 ひっそりとした目立たない変化です」
 「うん、そう。ひっそりとした変化だ」(太字体筆者)
 「そして状況も変わる。しかし本質的なレベルでは何も変化しない。そしてストーリーはそこでカット・オフされて終わる」
 「そう、カット・オフだ。イエス。何も変わらない。ザッツ・ライト」
 そこではまるでインタビューにならない。まるで大学のゼミの面接みたいである。³⁾

ここで、カーヴァーの意図する「ひっそりとした変化」とは、時間や空間に閉じ込められた人物たちの関係が危機へ向かう予感、あるいは和解へ導かれる予知を孕む空気の流れを読むこと意味していると思われる所以である。従って、郊外生活者の日常性を探る作業は、物語の細部をどう解読することができるか読者の想像力が試されているように思われてくるのである。そこで、以下において、習慣化した日常生活の中で小さな変化を引き起こす契機となる細かな事柄や、周囲の空気、人物の行為などを詳細に探し、それらの関連性について考察していきたいと思う。

2

1983年に発表されたW. アブラハムズの編集によるオーネンリー賞受賞短篇作品集に収められた『ささやかだけど、役にたつこと』は、郊外の住宅街に暮らす若い家族を取り上げている。カーヴァーが「小さな町とか、一戸建ての家が並んでいる郊外とか、そういうところのことを描くことが多いかもしれない」と自認するように、この作品は、普通の市民生活を送る人物たちを描き、彼らの生活の細部に潜む問題を見つめようとした作品である。ある土曜日の午後、若い母親アンが幼い息子のために誕生日を祝うためのケーキの注文をするためにパン屋に出向く。

The cake she chose was decorated with a space ship and launching pad under a sprinkling of white stars at one end of the cake, and a planet made of red frosting at the other end. His name, SCOTTY, would be in raised green letters beneath the planet. The baker, who was an older man with thick neck, listened without saying anything when she told him the child would be eight years old next Monday⁴⁾

子供の誕生日を嬉々として祝う心づもりの母親の様子には、生活のゆとりを感じさせる気負いがある。喜びを他人に押しつけてまで分かち合いたい母親は、ケーキに誕生日を迎える少年の喜びそうな飾り付けの数々を注文する。この屈託のない若い母親は、子供の誕生日の行事を精一杯演出しようとしている。一方、パン屋の方は、無口で無愛想である。パン工房の内部には、パイ皿やパン型が積み上げられた棚があり、ラジオからはカントリー・ミュージックが聞こえる。このパン職人の仕事場は郊外の住宅街のショッピング・センターの一隅にあり、雇い人もおいていない。

以下の引用は、浮き足立っているアンが無愛想なパン屋に対して、気分を害する場面である。

The baker was not jolly. There were no pleasantries between them, just the minimum exchange of words, the necessary information. He made her feel uncomfortable, and she didn't like that. While he was bent over the counter with the pencil in his hand, she studied his coarse features and wondered if he'd ever done anything else with his life besides be a baker. She was a mother and thirty-three years old, and it seemed to her that everyone, especially someone the baker's age — a man old enough to be her father — must have children who'd gone through this special time of cakes and birthday parties.⁵⁾

アンは、誕生日という特別の行事を祝おうとしてる客に対し素っ気無い態度をとるパン屋の態度が理解できない。彼女の父親程の年格好のパン屋にも子供のために誕生日を祝ってきた日々があるはずなのになどと手前勝手な憶測をするのである。アンには、子供をもつ親の権利を当然のものとして疑わない姿勢がある。

作品『大聖堂』においてはどうであろうか。物語の場面の主な設定は、カーヴァーの得意とする屋内である。ある日、夫婦二人の生活に泊まり客を迎えることになる。妻の旧友のロバートの来訪である。ロバートは視覚障害者であるが、大陸横断の長旅の後、さらに、列車でニューヨーク州まで長距離列車の移動をこなす。これまで、視覚障害に注意を払ったことがない夫である語り手は、ロバートの逗留を快く思わない。また、どのように応対してよいのか不安でさえある。しかも、彼は“*She told me he touched his fingers to every part of her face, her nose — even her neck!*”⁶⁾と、妻とロバートの友情に軽い劣情の入り交じった嫉妬を覚えたりする。さらに、彼は、ロバートに対する偏見を口走り、妻にたしなめられる。例えば、ロバートの亡妻の名前は黒人女性が多く使う名前であるという印象をもっていた夫は、“*Was his wife a Negro?*”⁷⁾と、ロバートが黒人と結婚していたのかなどと偏見混じりに問い合わせそうとするのである。しかし、ロバートが色眼鏡もかけておらず、髪もたくわえ、喫煙まで嗜むということが驚異であった。彼がこれまで抱いていた、視覚障害者に対する偏見は、悉く当てはまらない。このような夫が居間でロバートと一緒にテレビを観ることになるところから二人の関係に変化が起こっていく。テレビの画面には大聖堂の映像が映っている。大聖堂がどういうものであるかということを視覚障害者に説明することは不可能であった。緊張した空気が続く内、終に、夫は、言葉だけが相互理解の手段ではないことを理解していく。

作品『保存されたもの』の場面は、子供のいない若い夫婦、サンディと夫の家の中である。夫は3か月前に仕事を解雇された。初めのうちは、州の社会保険事務所に赴き職探しを試みるが、急に出かけるのを止めてしまい、目下、引きこもり状態を続けている。彼は、居間のソファから動こうとしない。“*It's like he lives there, Sandy thought. He *lives* in the living room.*”⁸⁾と、二人の睦み合いの場を独占されたばかりか、彼がそこを動こうとしないことにサンディは、うろうろするばかりである。“*That goddamn sofa! As far as she was concerned, she didn't even want to sit on it again. She couldn't imagine them ever having lain down there in the past to make love.*”⁹⁾ここでは、ソファは、遠く離れている夫の心の代替物となっているのである。かつて、二人の関係が順調だったときには、あのソファが二人の密接な関係を象徴していたが、今となっては、そのようなときは、遠い昔になってしまったとサンディは空しさを禁じ得ない。同じ家の中に暮らし、分かち合うことを拒絶された妻の苛立ちは次第に大きくなる。張り詰めた空気は、屋内という閉ざされた空間であるためにより息詰まる空気が強調される。しかしな

がら、サンディがソファに彼女のいらだつ気持ちを吐き出している内は、まだ、二人の関係には、修復の可能性があった。こうした状態が続くうちに、ある日、冷蔵庫が故障する。冷凍食品は調理されなければならない。新しい冷蔵庫が緊急に必要となる。夫は失業を理由に、サンディに協力的な態度を示さない。妻の鬱屈した感情が突然に抑制力を失う。食品は解凍し続ける。調理に向かう彼女の感情はフライパンに油を注ぐ度に過激になっていく。夫は、相変わらずソファに横になっている。次の場面では、そのような夫を見続けるサンディの気持ちを直接語る代りに、夫の様子を描くことで二人の状況を表わそうとする手法となっている点が興味深い。

Her husband's bare feet stuck out from one end of the sofa. At the other end, on a pillow which lay across the arm of the sofa, she could see the crown of his head. He may or may not have been asleep, and he may or may not have heard her come in. But she decided it didn't make any difference one way or other¹⁰⁾

このときの夫の突き出た‘bare feet’を、妻を無視する態度と受け止めたサンディは積極的な行動をとる決心をする。

以上、3作品について、それぞれの問題に導かれて行く背景について概観したが、登場人物の3夫婦の日常生活に起こるできごとは、その後、それぞれの夫婦の運命にどのような変化をもたらしていくのかを見ていかなければならない。それぞれの関係の変化は些細なできごとが契機となり、物語を展開させていくのであるが、あらゆる変化を内包する日常性の予想もつかなかった小さな変化の累積を人物たちがどのように受け止めるのか、3作品の詳細を以下の章で考察する。カーヴァーの描く人物たちの直面する課題を3様の生き方の中に観察し、それぞれ異なる生き方にもかかわらず、彼らの心情の深いところに共通して認められる不安定な精神、日常生活の空虚さ、孤独で人間関係の稀薄な人物像に追っていきたいと思う。そこで、カーヴァーが、作家と作品との関係について次のように語っていることに注目したい。

もちろん、実人生を小説にするときには、自分が何をしているのか知らなきゃならない。もの凄く大胆にならなきゃならないし、技巧にだけ、想像力豊かで自分自身のすべてを進んで語らなきゃならない。…自分の知っていることを書いている時に、自分の秘密ほどよく知っていることはないからね。¹¹⁾

この述懐には「秘密」を書く勇気が無ければ書くことはできないと率直に表明している。そこには、自らの行為を直視し、それを想像の世界につくり変える技量が作家の仕事であるという覚悟の程が伺われる。この作家の視線のはるか先には、アメリカ小説時代の世紀末へ向かう

時代の空気の中で自分を把握できない登場人物たちの心情の暗闇が見えてくるように思われる。そこには、60年代以降のアメリカ社会を圧倒的に支える層の人物像を描きながら、この作家自身をも含めた彼の熟知する人物たちが二重映しに描き出されているにちがいないのである。

3

前章においては、登場人物たちの日常生活の営みから垣間見えてくる陰りを探った。それでは、人物たちには何が原因で閉塞感、孤独、倦怠感を感じるのか、また、そのきっかけとなる要因はどこにあるのかを探っていくことにする。

『ささやかだけど、役にたつこと』における若い夫婦ハワードとアンは、息子が交通事故に遭遇するまでは、平穏な家庭生活を営んできた。病院で昏睡状態を続ける幼い息子に付き添うという状況下で、二人は、始めて夫婦の気持ちを確認し合うことになる。彼らは、息子の様子を見守りながら、互いに勞りあう。また、息子の覚醒がほとんど不可能と思われる場面において、アンがやっと彼女自身を支えているときに、二人は、始めて、祈るという行為の内に悲しみを共有し、息子の生還を祈念する。この場において、夫と妻が改めて互いを必要としている関係であることを認めあう。夫婦の絆を意識し、息子を見守りながら、アンは、夫への感謝の気持が芽生えてくるのである。

"I've been praying," she said.

He nodded.

She said, "I almost thought I'd forgotten how, but it came back to me.

All I had to do was close my eyes and say, 'Please God, help us — help Scotty,' and then the rest was easy. The words were right there. Maybe if you prayed too," she said to him.

"I've already prayed," he said. "I prayed this afternoon, yesterday afternoon, I mean, after you called, while I was driving to the hospital. I've been praying," he said.

"That's good," she said. For the first time now, she felt they were together in it, this trouble. She realized with a start that until then it had only been happening to her and to Scotty. She hadn't let Howard into it, though he was there and needed all along. She felt glad to be his wife¹²⁾

アンにとっては、祈るという行為は遠い昔の経験のように稀薄なものであった。息子のことでの、夫も祈っていてくれていたことを知ったアンは、初めて、彼の妻であることに喜びを覚え

る。このときまで、彼女は、事故のことを自分と息子との繋がりにおいてのみとらえていた。夫がこの災いをどう思っているのかまでは想像力が及ばなかった。

この若い夫婦は、息子に起こった悲劇的体験をとおして、やっと家族の意味と価値が理解できたのである。夫のハワードにとっても、これまでの人生は順調であった。彼は投資会社の若い共同経営者として将来性のある人物であった。“Until now, his life had gone smoothly and to his satisfaction — college, marriage, another year of college for the advanced degree in business, a junior partnership in an investment firm.”¹³⁾ この引用は、ハワードが順調に出世へ突き進んでいるという自負を表す件である。彼は、人生設計においても、結婚においても、生活環境においても安定していた。しかし、息子を失うという悲劇的体験を通して、大きな躊躇を経験する。

ところで、アンは、病院と自宅を行き来する間に誕生日ケーキのことは失念してしまっていた。失意の内に帰宅した二人に意地の悪い電話がかかってくる。“Your Scotty, I got him ready for you,”¹⁴⁾ とか “Have you forgotten about Scotty ?”¹⁵⁾ と、悲しみのさ中にいる夫婦にとって残酷に響く言葉が聞こえてくる。二人は、交代で付き添いから帰宅したときにも同じようなことがあったことを思い出す。無言電話であったり、息子の名を告げ、一方的に回線を切ったりといった電話であった。妻のアンは、電話の主がパン屋であることを思い出す。二人はパン屋に直行し、はげしい言葉のやり取りの後、スコッティが交通事故で亡くなったことを告げると、パン屋は謝罪する。彼は、夫婦に深く同情し、慰めの気持を伝えようと努める。

You probably need to eat something, the baker said. “I hope you’ll eat some of my hot rolls. You have to eat and keep going. Eating is a small, good thing in a time like this,” he said. He served them warm cinnamon rolls. Just out of the oven, the icing still runny. He put butter on the table and knives to spread the butter. Then the baker sat down at the table with them. He waited. He waited until they each took a roll from the platter and began to eat. “It’s good to eat something,” he said, watching them. “There’s more. Eat up. Eat all you want. There’s all the rolls in the world in here.”¹⁶⁾

こういう時だからこそ、何かを食べなければ身体がもたないことを促し ‘Eating is a small, good thing in a time like this.’ とパン屋が言うとき ‘a time like this’ という言葉は、残された者は生き続けなければならないのだという意味を含んだ説得力のある言葉である。

Then he began to talk. They listened carefully. Although they were tired and in anguish, they listened to what the baker had to say. They nodded when the baker began to speak of loneliness, and the sense of doubt and limitation that

had come to him in his middle years. He told them what it was like to be childless all these years.¹⁷⁾

パン屋の告白によれば、彼の身の上は孤独であった。迷いと限界に直面する中年になって、子供のいない寂しさを痛感していると語り始める。子供を失った夫婦の喪失感とは比較にはならないが、パン屋の孤独とこの夫婦の喪失感には感情の接点があった。“I don't have any children myself, so I can only imagine what you must be feeling.”¹⁸⁾と言うパン屋には、夫婦の悲しみを想像し、二人の気持ちに近づき、この若い夫婦の気持を慮ることで“It was warm inside the bakery.”¹⁹⁾と、優しさの感情が芽生える。パン屋が、今、彼の気持を伝えることができると言えば、それは、‘You probably need to eat something.’と言うことであり、また、食に携わる者として“It was better to be feeding people.”²⁰⁾と自負をもって、若い夫婦の悲しみを癒そうと努めるのである。しかしながら、心をとざし続けていたパン屋ではあったが、子供のいない寂しさを痛感しており、目の前にいる息子を失ったばかりの夫婦の悲しみを想像し、他人との関りを回復する契機を得ることができた。

『大聖堂』では、若い夫婦の家に、妻の旧友ロバートを迎えることになった訳だが、始めの内、夫は、孤独な生活を託す、彼の生活圏が侵されるような微かな不快感を抱く。夫は、軽い嫌がらせともとれる言葉を妻に向けることで、防御の態度を表わそうとする。軽い嫉妬心を交えながら、“Maybe I could take him bowling”²¹⁾と、問題を起こしかねない言葉を発する夫に向かって、妻は、厳しく戒める。

“If you love me,” she said, “you can do this for me. If you don't love me, okay. But if you had a friend, any friend, and the friend came to visit, I'd make him feel comfortable.” She wiped her hands with the dish towel.²²⁾

この場面で、妻が夫に発する‘If you love me,’という決め台詞と‘If you don't love me, okay.’という両極端のことばの間には、厳しく、二者択一を迫る態度を突きつけておきながら、ロバートを受け入れることについては夫に選択の余地を認めない姿勢を示している。つまり、夫の思わずに関わりなく彼女は自分の意思を押し通す態度を強く表わしているのである。妻に押し切られた印象の夫であるが、徐々に、ロバートの接待に努めていく。

夫とロバートは、一緒にテレビを観ることになるのだが、夫のためらいを直感したロバートは、次のように言う。

"Bub, it's all right," the blind man said. "It's fine with me. Whatever you want to watch is okay. I'm always learning something. Learning never ends. It won't hurt me to learn something tonight. I got ears," he said.²³⁾

このとき、夫は、ロバートの言葉の重みに何も答えることができない。しばらくして、テレビの画面には大聖堂が映し出される。ロバートは、テレビから聞こえてくる説明をしっかりと把握する。

I know they took hundreds of workers fifty or hundred years to build," he said. "I just heard the man say that, of course. I know generations of the same families worked on a cathedral. I heard him say that, too. The men who began their life's work on them, they never lived to see the completion of their work. In that wise, bub, they're no different from the rest of us, right?²⁴⁾

しかし、ロバートが聴覚で捉えたテレビの解説では大聖堂がどんな建造物であるかという実像には、少しも及んでいないのだ。また、夫も大聖堂の概観を説明しようとするが、その説明は全く要領を得ない。彼は、ことばのみによる説明の限界に気づき始める。ロバートも自分の理解の限界を知る。二人が、それぞれに、事態を自分の問題として受け止めたとき、歩み寄りが出てきた。

夫婦の関係については、『保存されたもの』のサンディが夫に対して抱く気持に微妙な不安定さが現れていく。

Sandy still loved him, even though she knew things were getting weird. She was thankful to have her job, but she didn't know what was going to happen to them or to anybody else in the world.²⁵⁾

ここでは、サンディは二人の関係を現実的に捉え、破たんの危機を意識しながら、感情の整理がつかないでいる。

この夫婦の関係は、その後、さらに悪化していく。運悪く冷蔵庫の故障により冷凍食品が大量に解凍し始める。冷蔵庫の買い換えが必要であるが、夫ははっきりとした意思を示さない。サンディは、中古品か競売かの選択を提案する。相変わらず、ソファに身を沈める夫の姿を眺めるサンディの心情については一言も語られず、何かが起こりそうな緊張の空気が伝わってくる場面が次の引用である。

She watched him sit down on the sofa and take up his book. He opened it to his place. But in a minute he put it down and lay back on the sofa. She saw his head come down on the pillow that lay across the arm of the sofa. He adjusted the pillow under his head and put his hands behind his neck. Then he lay still. Pretty soon she saw his arms move down to his sides.²⁶⁾

この3カ月もの間見てきた光景ではあるが、サンディは、我慢の限界にきていた。

She folded the paper. She got up from the chair and went quietly out to the living room, where she looked over the back of the sofa. His eyes were shut. His chest seemed to barely rise and then fall. She went back to the kitchen and put a frying pan on the burner.²⁷⁾

このとき、調理を始めたサンディの行為の中には彼女は怒りの感情が封じ込められ、夫に対する怒りは高温で肉を焼く過程と、途中でフライパンに油を注ぎ足す行為で、さらに、増幅されていく。

The pan was starting to smoke. She poured in more oil and turned on the fan. She hadn't been to an auction in twenty years, and now she was getting ready to go to one tonight. But first she had to fry these pork chops.²⁸⁾

この場面では、過去のできごとと現在進行中の事態が重なり、サンディの気持を更に硬化させていく過程が伺われる。競売については、サンディは、子供の頃父に連れられて行った時ことを痛みをともなう懐かしさで思い出す。後に、父は、競売で購入した中古車の車内に漏れた排気ガスがもとで中毒死したのであった。この瞬間に、サンディの脳裏には、父に競売に連れて行かれたことと父を失ったイメージが重なった。さらに、フライパンから立ち上る煙が勢いよく換気扇を通って外気に吸い込まれていく場面では、サンディの過去への憧憬や痛みが夫に対する不満の感情がない交ぜになって煙りの行方と重なっていくのである。收拾の余地なく過ぎるときの交錯する場面はフラッシュ・バックの技法が用いられ、危機迫るサンディの心情が効果的に表われている。

Smoke was being drawn up through the vent over the stove. She stepped to the doorway with the pan and looked into the living room. The pan was still smoking and drops of oil and grease jumped over the sides as she held it. In the

darkened room, she could just make her husband's head, and his bare feet.²⁹⁾

サンディの動揺をよそに暮れ泥む夕闇に包まれた居間の静寂さとソファから裸足を突き出して横になっている夫の寝姿が対照的である。台所では、挑むように、油が音を立てているフライパン片手に、煙の中に仁王立ちになっているサンディの姿が際立つ場面となっているのである。

4

以上、3作品について、登場人物たちの抱える内面の問題について解釈を試みた。次にカーヴァーの世界に登場する人物たちの営む家庭、夫婦の関係に見られる特有の脆さについて考えてみたい。彼らは郊外生活者となったことで型どおりのライフ・スタイルに組み込まれていったが、やがて名状しがたい退屈と孤立感が彼らの心に浸透していく。そこには、ある独特の家庭という型の中に埋没していき、個を失ってさ迷う生き方が認められるよう思われる。彼らの精神の病根を探る上で、次の引用は、郊外生活者の日常性に沈滞した空気を伝えており示唆的である。

カーヴァーの描く郊外の中流階級の人々は、その作品から察せられるかぎり、
アメリカン・ドリームといった、たいそうな期待をもって郊外に移った人々の
ように思えない。言葉をかえるなら、広告や、テレビのホーム・ドラマの世
界に憧れ、そのイメージのなかに自分たちも入っていこうとしたわけではない
ということだ。彼らは、そういうことが当たり前となった世界のなかで、当た
り前のようにそうした生活に入っていた。そして、時間が経つにしたがって、
あるいは、ささやかな出来事がきっかけとなって、これまで気づくことのなかっ
たアメリカン・ファミリーの強固な枠組みにしっかりとくみこまれていること
がわかってくる。しかし、その枠組みに気づくころには、すでにまったく動き
がとれない状態におちいっているのだ。³⁰⁾

カーヴァーの登場人物たちは、彼らの住んでいる生活環境の中へ夢や希望を託して入り込んだわけではない。彼らの世界からは、かつて、アメリカが誇ってきた生活を勝ち得た者の野望や理想についての意気込みは感じられない。所与の状況下で自分たちの型にはまった、繰返される日常性へ押し流されていく生き方が見受けられるのである。

『ささやかだけど、役にたつこと』の結末においては、パン屋の身上の吐露がハワードとアンを強く引きつけているように印象づけられるが、実際には、パン屋を必要としているのは、

若い夫婦の方であると思われるのだ。パン屋の語る老いや迷いの人生と体力的限界の現実は、二人には遠い先の問題である。彼らは、子供を失ったばかりの不安定な心情をひたすら耐えるという試練に直面していたのだ。一方、パン屋は最早、無口で、無愛想な人物ではなくなった。彼は、若い夫婦の悲劇的体験に接して、これまで閉ざしてきた気持を開くことができたのである。“I’m not an evil man, I don’t think. Not evil, like you said on the phone. You got to understand that what it comes down to is I don’t know how to act anymore, it would seem.”³¹⁾と言うパン屋には、彼のこれまでの人生において封印されてきた過去の陰りが印象づけられるが、二人を受け止め、少しでもこの夫婦の大きな痛みを癒すためには、焼き立てのパンを振る舞うことが、ささやかでも、役にたつ行為であったのである。その行為により、閉じてしまっていたパン屋自身の心が開き、若い夫婦を激励することができたのである。つまり、‘It was better to be feeding people’ という自負をのぞかせた表現の背後には、彼自身も若い二人を受け止めることにより、外の世界との関わりを回復できたことを意味すると思われる。パン屋の優しさに触れて、二人は店を去りがたく思うのだが、実は、この夫婦にとっては、自分たちの家で、二人だけで向き合わなければならない悲しみは苦難であったのだ。喪失の感傷があまりに強いため、“They did not think of leaving”³²⁾ という最後に一文には、二人の恐怖の心情が現れないと読みとれる。“Howard, he’s gone. He’s gone and we’ll have to get used to that. To be alone”³³⁾と、アンが、一度は言葉に発し、息子の死の現実を受け止めていかなければならないと強がってはみたものの、彼らの悲しみはあまりにも生々しいのだ。二人の脆い精神状態を受け止めてくれる存在としてパン屋の存在が必要であった。この夫婦は、これからも、何度も繰り返し襲ってくる悲しみを引き受けいかなければならないのだ。繰り返される喪失感の予測は恐怖であるにちがいない。こうした状況を回避するために、二人には、パン屋の話を熱心に聴くことで忘我になることが必要であったのだ。一方、パン屋にとっても、図らずも、二人との出会いによって、自らの胸襟を開くことができ、他人に必要とされる自分の存在を確認することができたのである。

『大聖堂』の夫は、ロバートを迎えるに際して、客への接待にぎこちなさを隠さない。しつかり習慣化した日常生活のせいで、外の世界と関わるのを拒むかのような姿勢が伺われる語り手の夫ではあったが、努力してロバートに大聖堂の某かを伝える必要性が生じた。ロバートの提案に従い、二人が協力して大聖堂の輪郭線をなぞっていくことになった。夫の手に重ねたロバートの手がしっかりと夫の手の動きを感じていく場面は、感動的な場面である。

So I began. First, I drew a box that looked like a house. It could have been
the house I lived in. Then I put a roof on it. At either end of the roof, I drew
spires. Crazy.³⁴⁾

その間、ロバートは、夫の手をしっかりと掴み、“Go ahead, bub, draw,”³⁵⁾と誘導する。さらに、“Draw. You'll see. I'll follow along with you. It'll be okay. Just begin now like I'm telling you. You'll see. Draw,”³⁶⁾と促していく。夫は、始めは、この強いられた行為を愚かしいものとらえていたが、大聖堂の輪郭が描き上り，“Never thought anything like this could happen in your lifetime, did you, bub? Well, it's a strange life, we all know that. Go on now. Keep it up.”³⁷⁾とロバートに言わされたとき、夫の心に名状しがたい変化が生じる。夫にとっては、新鮮で感動的な経験となった場面が以下の引用である。

So we kept on with it. His fingers rode my fingers as my hand went over the paper. It was like nothing else in my life up to now.

Then he said. “I think that's it. I think you got it,” he said.

“Take a look. What do you think?”

But I had my eyes closed. I thought I'd keep them that way for a little longer.

I thought it was something I ought to do.

“Well?” he said. “Are you looking?”

My eyes were still closed. I was in my house. I knew that.

But I didn't feel like I was inside anything.

“It's really something,” I said.³⁸⁾

視覚障害者を障害を負う人間としてのみとらえていた夫は、彼の心の暗部をロバートに見つかされているように思う。夫は、しばらく目を閉じたままで、何かを理解しようとする。この場面において、カーヴァーの技巧は、ロバートと夫を対照させることにより、可視の世界と不可視の世界を交差させるという手法をとった。二人の共同作業により、それぞれが互いに、大聖堂について目に見えない何かを感じとるということになった。ロバートにとっては、大聖堂の輪郭を把握することを可能にし、一方、夫にとっては、彼の意識の深いところに感動を引き起こした。漠然とではあったが、言葉を超えたところでの気づきは彼自身の心が開かれるという啓示にも似た経験となった。‘I was in my house. But I didn't feel like I was inside anything.’ という気づきは、長いこと家の日常生活中に埋没して外の世界への理解を拒んできた夫の心に衝撃を与える経験となったのだ。

『保存されたもの』の結末は、夫婦の関係が維持されるべきか否かの危機に瀕することを壊れた冷蔵庫と二重映しにしているのであるが、サンディの競売に対する強いこだわりは、夫に対する疎外意識を増幅させた。ソファに横になり、台所に入るサンディの方に突き出すように向けられた夫の裸足は、彼女を拒絶するものとして印象づけられる。そばまで行って、夫の様

子を見下ろすサンディの目が冷ややかで、僅かに夫が呼吸していることを確認していると捉えられる場面においては、彼女の言葉にならない感情が増幅されていき、彼女の続く行為の中に凝縮されていく。彼女の焼き上げた肉は、“The meat didn't look like meat. It looked like part of an old shoulder blade, or a digging instrument.”³⁹⁾と、「肩甲骨」や「土を掘る道具」として形容される程、固く封じ込められたサンディの感情を表わしている。さらに、サンディは夫に焼き上げた肉を食べるよう強制する。

“Sit down,” she said to her husband once more. He moved his plate from one hand to the other. But he kept standing there. It was then she saw puddles of water on the table. She heard water, too. It was dripping off the table and onto the linoleum.⁴⁰⁾

この情景には二人の間の緊迫した空気が強調されている。テーブルの上の解凍された食品からは、流れ出た水が床にしたたり、夫の素足を濡らした。サンディの耳にも聞こえた滴る水の音や、台なしになった食品は、この日の二人の関係の危機的瞬間が暗示されるし、床に流れ落ちる水に足を濡らしたまま無言で立ちつくす夫の様子には、このような状態にまでなった二人の関係の時間の経過を食品の解凍の時間に重ねていると読み取ることができる。物語の結末は、硬化した夫婦の関係が行き場を失った状態でカット・オフされる。

She looked down at her husband's bare feet. She stared at his feet next to the pool of water. She knew she'd never again in her life see anything so unusual. But she didn't know what to make of it yet. She thought she'd better put on some lipstick, get her coat, and go ahead to the auction. But she couldn't take her eyes from her husband's feet. She put her plate on the table and watched until the feet left the kitchen and went back into the living room.⁴¹⁾

この場面においては、夫の裸足は、無為と倦怠だけではなく、サンディを拒絶し、彼の閉ざされた世界に埋没する姿に映る。この情景を見続けるサンディには事態の收拾の術がない。夫の沈黙と繰り返し表れる‘feet’は、サンディに向けた脅威の一撃の連打となっている。取り残され、動顛しているサンディについて多弁は不必要である程、夫の裸足が効果的に彼の心情を代弁している。皮肉なことに、解凍されてしまう食品に対し、凍結してしまうのはサンディの気持ちの方である。

以上、この章においては、3つの異なる家庭の日常性の背後に起こりうる問題について、登

場人物たちの脆く、不安定な心情が露呈していく過程を追った。彼らは、アメリカの戦後世代からさらに引き継いだ新しい世代である。彼らの問題は習慣化し深く沈潜した日常性の中から掘り起こされたものである。カーヴァーは、そうした問題を引き出すために、人物たちの習慣化している行為、生活必需品、家具調度品に注目し、彼らの関係の亀裂や鈍化している考えを内側から探っている作家であることが理解されてくる。家庭という設定から彼らの問題を見つめるカーヴァーの着眼点は、孤独、退屈、怠惰を託す人物たちの人生の諸相を描き出すことにより、家庭という枠組の内側から彼らの内奥の不安定な心情や闇を探ることにあった。人物たちの心情の断片は、ひそかな変化のきっかけを孕み、堆積し、日常性という幕で覆い隠されていることが理解されてくるのである。

結 論

本稿では、レイモンド・カーヴァーの作品の中から3編の若い夫婦の物語を取り上げて家庭内という設定の中で日常生活の延長線上に生じる夫婦の関係、他者とのかかわりの微妙な変化の意味するところを考察してきた。先ず、『ささやかだけど、役にたつこと』では、平穏に続くと思われる日常生活でひとり息子を失うという突然の悲劇に襲われた若い両親の動揺とその後の二人の心の動きを探った。次に『大聖堂』では、若い夫婦が妻の旧友の視覚障害者を客人として迎え入れ、初めは、多少の不満を隠さなかった語り手の夫が、心の内を見つめる世界への広がりへ導かれ得ることを感動的に受け止める過程を追った作品である。また、『保存されたもの』では、生活必需品の冷蔵庫が故障をきたすことで縛の入る夫婦関係について、その緊迫した空気を読んだ。これら3作品からは、何かしらうそ寒い、危うさを内包した若いアメリカ人の夫婦の営む家庭が見えてくる。3、40年前まではニュー・フロンティアと呼ばれた中流階級の家庭の夢の実現を可能にした郊外居住者たちは、世代が変わり、家族構成や家族関係も変化させていった。ベトナム戦争、市民権運動など時代が抱える問題が、家庭のあり方に影響を与え新しい意味づけを与えた。それでもなお、アメリカ人にとっての家庭は、その枠組みを維持する。次の引用を見てみよう。

アメリカの物語は、家と家庭の物語だ。アメリカにおける初代までさかのばることの出来る家族の歴史は、かたときも自分を離れることがない。そして、その自分がいま営んでいる家庭は、アメリカ人としての自分が、いまどのくらいの完成度や成功度に達しているかを、即座に査定される現場だ。そして国家理念の個人における体現を引き受けるアメリカ人は、いまよりさらに完全なアメリカ人になるべく常に努力を自らに課している。これでもういい、という段階はまずない。より完全なかたちでアメリカ人となるための努力は、生きてい

るあいだずっと続く。

そのような個人が集まって営む家庭は、アメリカの家庭としてよりいっそう理想的な家庭になっていくことを、信仰といってもいいほどの目標として、かかげている。生きていくうえで遭遇するありとあらゆる価値観やものの考え方、感情、葛藤などが、家庭に流れこみ、投げこまれる。⁴²⁾

カーヴァーの描く人物たちが引受けている現実には、不安定ながら家庭がある。失業、孤独、退屈、無為に身を置く様子が印象づけられる状況下であっても、日常性について言及するところには家庭という基盤がある。活動的な外の社会からはじき出されたような生活者にも家の中に占める場がある。悲劇を体験した者、沈滞した空気と現状維持を託す人物たちにも、少なくとも、「自分」の身を置く場としての家庭がある。カーヴァーは、そのような人物たちと環境の中に沈潜する空気を読んだ。その目に見えない空気の流れる方向を左右するのは、あくまでも、内側で起こる静かで、ささやかな変化であるということを確信している作家の視点を認めることができる。

カーヴァーは、場面や人間関係を狭めていく程に、語るべき多くのことを凝縮させていったが、周辺の情景、道具などとの関わりに人物たちの心模様を映し出す役割を託すのは、それらが人物たちの不足な程の表現力を補うことになるからである。さらに、彼らの関係を鋭く浮き彫りにするためにカット・オフ手法を用いて、問題となる断片を切り取る効果を試みているようと思われる。こうした手法について、カーヴァーは、次のように述べている。「私自身が物語のなかで会話を控えるのである。そして、登場人物を取り囲む調度品や身のまわりの道具を必要とあれば物語のなかに投げ込む。」⁴³⁾それゆえに、『ささやかだけど、役にたつこと』における、病院内を頻繁に行き来する異なる色のユニフォームを着た病院関係者を素早く、手短かに押入することで、事態の深刻さと若い両親の不安を無言の内に増幅させていく。また、『大聖堂』におけるテレビの役割は大きい。夫と視覚障害者のロバートにとっては、テレビの画面に映し出される映像が二人の間のコミュニケーションを密度の濃いものにしていく過程となっていることも理解されてくるのである。『保存されたもの』における夫の前には、長時間つけっぱなしのテレビがサンディと夫との間を妨げるような威圧感を印象づける存在となっている。夫は、特定の番組を楽しんでいるわけではなく、テレビの画面の内側の遠い音声に彼自身の空虚な声を吸収させてしまっているかのようなのだ。

このように、カーヴァーの得意とする手法に読者が引きつけられるのは、カーヴァーの視線の赴く方向に読者が従うと、室内という閉ざされた空間でありながら、そこには多くのことを語る題材が提供されていることを知ることになるからである。つけ加えるならば、例えば、居間に置かれたソファ、ページを開いたまま伏せられている複数の雑誌なども人物の状況を語る道具であろうし、それらは、彼らの語る言葉以上に饒舌でさえある。テレビなど普段よく馴染

んでいるものほど、人物との関係を効果的に機能させている。つまり、カーヴァーの人物たちは、彼らが直面している状況に対して言葉による表現や説明が不十分であることが多いため、彼らの心情を理解するためのキーワードとして道具の様態を観察することは重要なことがある。しかしながら、人物たちに共通する表現力不足の問題には、そのこと自体に他者にたいする想像力の欠如という問題を抱えている。次の引用は、こうした人物たちの性格の特質をよく分析している。

カーヴァーの小説に現れる人びとの多くは自分の内面や苦悩を自分の言葉で表現できず、しかもそれでいてそのこと自体に気づかずにいる。主人公たちは自分の置かれた状況を多少は理解できる知性と感性を持ち合わせてはいるものの、より深いところに根差す衝動を理解することも、また制御することも不十分なまま、**宙ぶらりんの状態**にとどまりつづける。⁴⁴⁾

カーヴァーの描く郊外生活者の家庭生活の日常的な営みに充満する沈滞した空気は、感情表現が貧困な人物の迷いや苦悩がそのまま無為の行為の中に沈潜して反映する。日常生活の延長上に生じる小さなできごと、ささやかな変化は人物の内奥に作用するが、表現力の乏しさが彼らを、より一層、閉ざされた世界に封じ込めてしまう。外の世界との関係が稀薄になるほどに現実感覚が乏しくなることを心得たカーヴァーが、無口な、あるいは、表現力の不十分な人物たちの代弁者となって、彼らの失敗や欠陥にも隠された意味を見出そうとしていると思われるるのである。“Carver's greatest sympathy is reserved for those characters who struggle to use language to make sense of things, but who founder or fail in the attempt”⁴⁵⁾ という評価には、カーヴァーが、彼の生きた時代の病根として、彼の代弁を必要とする人物たちを創造したことにより、60年代から80年代のアメリカ社会の時代の激しい変化が彼らの背後に控えていることを思い知らされるのである。

テキストは次のものを採用した。

1. Carver, Raymond *A SMALL, GOOD THING* (1983) (Two Delightful Stories) 南雲堂 2004年3月30日 pp. 1 -42.
2. *CATHEDRAL* (1994) (Masterpieces of Contemporary American Short Stories) 英宝社 1996年1月10日 pp. 7 -27.
3. *PRESERVATION* (1983) (Best Stories of Contemporary American Authors) 英潮社新書 1989年5月5日 pp.34-45.

尚、各作品の邦訳タイトルは、村上春樹 翻訳ライブラリー版 『大聖堂』2007年3月10日発行を採用した。
1. 『ささやかだけど、役にたつこと』

2. 『大聖堂』
3. 『保存されたもの』

注

- 1) 大場正明「郊外生活者の日常ならざる日常」——『ユリイカ10月号（特集＝変貌するアメリカ文学——リアリズムの新しい流れ）』青土社 1987年 pp.187-188.
- 2) レイモンド・カーヴァー／村上春樹訳 『夜になると鮭は…』中央公論社 昭和60年10月20日 4版発行 p.180.
- 3) Ibid., p.180.
- 4) *A SMALL, GOOD THING*, p.1.
- 5) Ibid., p.2.
- 6) *CATHEDRAL*, p.8.
- 7) Ibid., p.10.
- 8) *PRESERVATION*, p.35.
- 9) Ibid., p.35.
- 10) Ibid., p.37.
- 11) レイモンド・カーヴァー／越川芳明編訳「家のなかの物語」——『ユリイカ10月号（特集＝変貌するアメリカ文学＊インタビュー）』青土社 1987年 p.70.
- 12) *A SMALL GOOD THING*, pp.12-13.
- 13) Ibid., p.5.
- 14) Ibid., p.34.
- 15) Ibid., p.34.
- 16) Ibid., p.41.
- 17) Ibid., pp.41-42.
- 18) Ibid., p.40.
- 19) Ibid., p.41.
- 20) Ibid., p.42.
- 21) *CATHEDRAL*, p.10.
- 22) Ibid., p.10.
- 23) Ibid., p.21.
- 24) Ibid., p.22.
- 25) *PRESERVATION*, p.36.
- 26) Ibid., pp.42-43.
- 27) Ibid., p.43.
- 28) Ibid., p.43.
- 29) Ibid., p.44.
- 30) 大場正明『サバービアの憂鬱——アメリカン・ファミリーの光と影』東京書籍株式会社 1993年 p.230。
- 31) *A SMALL, GOOD THING*, p.40.
- 32) Ibid., p.42.
- 33) Ibid., p.33.
- 34) *CATHEDRAL*, p.25.
- 35) Ibid., p.25.
- 36) Ibid., p.25.
- 37) Ibid., pp.25-26.
- 38) Ibid., p.27.
- 39) *PRESERVATION*, p.44
- 40) Ibid., pp.44-45.
- 41) Ibid., p.45.

- 42) 片岡義男編『アメリカ小説をどうぞ——17 Views of Life in America』昌文社 1990年 pp.480-481。
- 43) レイモンド・カーヴァー／越川芳明訳「焰」——文学と影響について『ユリイカ10月号——(特集=変貌するアメリカ文学)』青土社 1987年 p.75.
- 44) 日本マラマッド協会編『アメリカ短編小説を読み直す——女性・家族・エスニシティ』北星堂書店 1996年 p.92.
- 45) A.O.Scott. "Looking for Raymond Carver" (*The New York Review*) August 12, 1999, p.59.

A Reading of Three Stories from Raymond Carver's works
— An Essay on *A SMALL, GOOD THING, CATHEDRAL*, and *PRESERVATION* —

KAWASE Hiroko

Abstract

America has developed a new cultural map in the outskirt of big cities. Raymond Carver has shown an insightful observation to the lives of the suburban residential area, trying to dissect their lifestyle. The suburb has long been the ideally standardized locale of American way of life ; such as, having one's own individual houses with neatly cared yards and gardens, and spatial garages for two or three cars. There they could live far from the madding crowd and enjoy the materialistic comfort. To the majority of Americans, the suburb has been a new cultural frontier. Carver picks up three young couples' lives in that surrounding and studies carefully their mentality in order to characterize the ones of 'suburbia'. In the case of *A SMALL, GOOD THING*, a young couple had a son whose birthday comes soon ; the birthday cake being ordered to the baker ; however, the boy is hit by a car and dies eventually ; while the baker keeps nasty callings to their home. At the end of the story, the baker apologizes and he tries to console the couple for the loss of their child. In *CATHEDRAL*, the husband of a young couple, having an overnight guest who is blind, learns what is meant to be blind at the end of the story. There is a moment of enlightenment for the husband. In *PRESERVATION*, the refrigerator becomes out of order and that leads to the fragility of the relationship of a young couple ; the tension and void in closed-in atmosphere between them causes a serious ending. In the three lives of the suburban landscape we learn how each lifestyle is isolated from rest of the world. Once to become the suburbia is a dream for the middle-class American families. However, despite the fact of the future-oriented American dream, the suburbia faces uncertainty, fear, and isolation. There is no such a hope as was seen once upon a time. Carver overshadows the suburban life and reveals the pitfalls of an individual psyche in that surrounding.

Keywords: suburbia, isolation, routine

(かわせ ひろこ 本学人文学部教授 アメリカ文学専攻)